

幼稚園

令和6年度

教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究構想図	2
III	研究内容	3
1	「幼児が自信をもって行動する」ことと「幼児が目当てをもち、考え行動する」 姿との関連性	3
2	本研究における「目当てをもつ」姿の捉え	4
IV	検証保育	4
1	3年保育 5歳児 9月上旬	4
2	2年保育 4歳児 9月下旬	7
3	2・3年保育 5歳児 11月上旬	10
V	研究の成果	12
VI	今後の課題	13

研究主題

自信をもって行動する幼児を育てる

～目当てをもち、考え行動する姿を支える教師の援助と環境の構成～

I 研究主題設定の理由

幼稚園教育要領第1章総則 第1「幼稚園教育の基本」では、「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。」と示されており、「その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、幼児は人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。」と示されている。

また、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中央教育審議会 令和3年1月26日）第I部総論「3. 2020年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿（1）子供の学び」では、「幼稚園等の幼児教育が行われる場において、（中略）質の高い教育が提供され、良好な環境の下、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で達成感を味わいながら、全ての幼児が健やかに育つことができる。」と示されている。

各園の幼児の実態を話し合う中で、「興味をもった環境に関わり、遊び始める」や「自分のやりたい遊びを見付け、やってみようとする」といった姿が見られる一方で、「自分で考える前に大人に頼ったり、すぐに諦めたりする」、「自分で考えたり、判断したりすることに自信がもてず、遊びが進まない」などといった姿が見られることが共通の意見として出された。さらに協議の中で、「主体的に環境に関わり遊ぶ中で、様々なことを感じたり、考えたりして、目当てをもって遊ぶ楽しさや充実感・満足感を味わってほしい」、「目当てをもち、自分で考えたり工夫したりして取り組み、自分の力でやり遂げる体験を積み重ね、自信をもってほしい」という教師の願いを共通理解し、本研究を進めることとした。

これらのことを踏まえ、本研究では、研究主題を「自信をもって行動する幼児を育てる」と設定した。また、幼児が身近な環境に主体的に関わり、遊びを楽しむ中で見付けた目当てに向かって考えたり、工夫したりしながら諦めずにやり遂げる体験を通して達成感を味わうことが大切であると考えた。そのためには、教師が一人一人の幼児理解に基づいた援助や環境の構成を工夫することが重要であると考え、副主題を「目当てをもち、考え行動する姿を支える教師の援助と環境の構成」と設定した。

Ⅱ 研究構想図

<幼稚園教育要領>

- 第1章総則 第1 幼稚園教育の基本
「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」
- 第1章 第2 3 (2) 自立心
「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」
- 第2章 人間関係 2 内容 (2)
「自分で考え、自分で行動する。」

<幼稚園教育要領解説>

- 第1章 第2節 3 (2) 自立心
「いろいろな遊びから自分がやりたいことを自分で選んで行動し、少し難しいと思うこともやってできた満足感を味わうなどの体験の積み重ねの中で育まれることに留意する必要がある。」
- 第2章 第2節 2 人間関係 (2)
「自分がやりたいことをもち、自分から興味や関心をもって環境に関わり、活動を生み出すことが大切である。さらに、その活動を楽しみながら展開し、充実感や満足感を味わう中で、次第に目当てをもったり、自分の思いが実現するように工夫したりして、そのような課題を自分で乗り越えることが極めて大切である。」

<令和6年度教育研究員 共通研究テーマ>

全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現

<課題となる幼児の実態>

- 遊びや生活の中で、自分で考える前に大人に頼ってしまったり、できないとすぐに諦めたりしてしまい、自分で考え、自分の力でやってみようとする経験が少ない。
- 興味をもった環境に関わり遊び始めるが、自分で考え判断することに自信がもてず、遊びが進まなかったり、持続しなかったりする。

<部員の願い>

- 主体的に環境に関わり遊ぶ中で、様々なことを感じたり、考えたり、やってみたりし、目当てをもって遊ぶ中で、充実感や満足感を味わってほしい。
- 目当てをもち、自分で考えたり工夫したりして取り組み、自分の力でやり遂げる体験を積み重ね、自信をもってほしい。

<目指す幼児像>

- ・遊びの中で充実感や満足感を味わい、目当てをもって遊ぶ幼児
- ・自分の思いを実現するために、諦めずにやり遂げ、自信をもって行動する幼児

<研究主題>

自信をもって行動する幼児を育てる
～目当てをもち、考え行動する姿を支える教師の援助と環境の構成～

<研究の仮説>

幼児が遊びを楽しむ中で目当てをもち、自ら考え行動することができるよう、一人一人の幼児理解に基づいた援助や環境の構成を工夫することで、自信をもって行動する幼児が育つだろう。

<研究内容>

- 1 幼児が目当てをもち、考え行動する姿の過程を明らかにする。
- 2 幼児が遊びを楽しむ中で、目当てをもち、考え行動する姿を支える教師の援助と環境の構成を探る。

Ⅲ 研究内容

1 「幼児が自信をもって行動する」ことと「幼児が目当てをもち、考え行動する」姿との関連性

(1) 幼児が自信をもって行動するようになるために必要な体験について

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の一つである「自立心」は、幼稚園教育要領解説において、次のように示されている。

「幼児は、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、信頼する教師に支えられながら、物事を最後まで行う体験を重ね、自分の力でやろうとする気持ちをもったり、やり遂げた満足感を味わったりするようになる。」
(太字は本研究による)

「教師や友達の力を借りたり励まされたりしながら、難しいことでも自分の力でやってみようとして、考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げる体験を通して達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」
(太字は本研究による)

このことから、幼児は、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、信頼する教師に支えられながら、物事を最後まで行う体験」や「難しいことでも自分の力でやってみようとして、考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げる体験」を通して、満足感や達成感を味わい、自信をもって行動するようになるということが分かる。

そこで、幼児が自信をもって行動するようになるために必要なこれらの体験の中で、具体的にどのような過程があるのかを協議した。

(2) 幼児が目当てをもち、考え行動する姿の過程を明らかにする

幼稚園教育要領解説 第2章 第2節 2 人間関係 (2) 自分で考え、自分で行動することについて、次のように示されている。

「まず、自分がやりたいことをもち、自分から興味や関心をもって環境に関わり、活動を生み出すことが大切である。さらに、その活動を楽しみながら展開し、充実感や満足感を味わう中で、次第に目当てをもったり、自分の思いが実現するように工夫したりして、そのような課題を自分で乗り越えることが極めて大切である。」

このことから、幼児が、「課題を自分で乗り越えること」が大切であると分かる。

本研究では、幼児が自信をもって行動するようになるために必要な「課題を自分で乗り越えること」を保障するには、目当てをもち、考え行動する姿の過程を捉える必要があると考え、次の図1のように表すこととした。

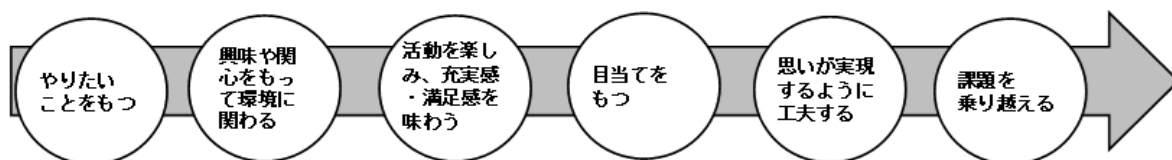


図1 目当てをもち、考え行動する姿の過程

図1のような過程が見られるよう、一人一人の幼児理解に基づいた援助や環境の構成を工夫することで、自信をもって行動するようになることを考えた。

また、この図1にある各過程は、幼児の思いや願いによって行きつ戻りつするものであると考えた。

2 本研究における「目当てをもつ」姿の捉え

幼稚園教育要領解説から、幼児の思いや願いは、「やりたいこと」「目当て」「課題」と変化していくことが読み取れる。

本研究では、部員が実践してきた遊びの事例を基に協議をし、幼児が「目当てをもつ」姿を、「様々な対象（もの・人・こと）」に探究心や好奇心をもって十分にに関わり、充実感や満足感を味わって遊ぶ中で、自分の思いや願いの実現に向けて状況を変化させたり、やりたいことがより明確になっていったりする」姿であると捉えた。

IV 検証保育

教師が幼児一人一人の姿を見取り、一人一人の幼児理解に基づいた適切な援助や環境の構成を工夫することが、幼児が遊びを楽しむ中で目当てをもち、自ら考え行動することができる姿につながるかを検証するため、検証保育を行った。

1 3年保育 5歳児 9月上旬 A児の目当て「ゲームで使う人形の腕を頑丈に作りたい」

<A児の実態>

- ・ 製作が好きで、「こういう物が作りたい」と具体的なイメージがあり、身近な道具や材料を使って自分で作っている。
- ・ 進級当初、自分のイメージどおりのものが作れないと、途中から教師に託すことが多かった。教師はできるだけ本児が自分の力で作れるように製作方法を提案したり、投げ出したくなる気持ちに寄り添いつつやり遂げられるよう応援したりするなど、個別に援助してきたことで、7月頃から徐々に自分の力で工夫して作ることを経験し始めている。

幼児と教師の言動	分析	
	幼児の心の動き	◆教師の援助 ☆環境の構成
目当てをもつ		思いが実現するように工夫する
・ A、B、C児の3人がもぐら叩きゲームに使うもぐら代わりのキャラクターの人形を一緒に作ろうとしている。 ・ B児が、A児に「どこを作るの?」と聞くと、A児は、人形のイラストの腕の部分を指さして「ここ。」と答える。 ・ A児は、人形の腕をイラストと同じように垂直に付くようにアルミホイルを巻く。小さいアルミホイルで巻くが安定しない。上から大きく切ったアルミホイルを巻き何度も確認しながら作っている。	・ 「人形の腕を作りたい」と自分のすることを明確に示し、目当てをもっている。 ・ A児は画像と同じように作りたいと思い、腕が垂直に付いているか、動かしても取れないか、確かめながら作っている。	☆ イメージがもてる、膨らむ写真（視覚教材） 一緒に作る幼児同士でイメージを共有できるように、作りたい物（キャラクター）のイラストを製作の場に置いておく。 ☆ 自分で扱える・選択できる素材や道具 自分で作り上げていく経験ができるように、これまでの製作経験で扱ったことのあるアルミホイルやガムテープ等を用意する。

他グループ（もぐら叩きゲームの土台を担当）の幼児が来て「人形は、まだですか？」と聞く。A児は、「人形は、まだ修理中です。」と答え、腕が付いたか確かめながら「叩かれたら壊れそう。」と言う。	A児は、ゲームの時に動かす時のことを考え、「壊れないように頑丈な腕を作りたい」と新たな目当てをもつ。	☆余裕のある時間と物の確保 自分の考えで作ってみたいを試したりする姿につながるよう見守り、幼児が自分たちで考える時間を保障する。
思いが実現するように工夫する		
- 他グループの幼児が「少し手伝っていいかな？」と聞くと、A児は「どうして？だめだよ。」と言う。A児は、人形の二本目の腕を作り始め、一本目と同じように垂直に付けようとしてアルミホイルを重ねて巻いている。教師は「どうやって穴から出てくるか楽しみだね。」と言う。C児は「（もぐらが出る穴に）入らないかも。」とつぶやく。 - A児は人形の腕ができ上がると、玄関ホールへ出て、他の教師に見せに行く。 - A児は土台の穴を見るなり「（やっぱり腕が）大きいな。要らなかったかも。」と言って、自分で人形の腕を取る。	- A児は自分で作りたい思いがあり、手伝ってほしくないという気持ちや自分で作り上げたいという気持ちがある。 - 完成して嬉しい、他の人に見てもらいたいという気持ちが高まるとともに、自分で最後まで作ることができた満足感を味わっている。 - A児はもぐら叩き用の土台の穴を見て、自分の作った腕が大き過ぎると分かり、残念に思っている。	◆意識化できるような言葉掛け A児が今、どのような思いで、どのように作ろうとしているのかを読み取り、教師の期待や完成を待ち遠しく思っている気持ちを伝え、意欲が持続するようにする。 ◆やりたいことに出会うまでの時間を保障する A児が自分の思いを実現させ、満足感を味わっていることを認め、次の目当てや課題を見付けるまでの時間を保障する。
やりたいことをもつ 課題を乗り越える		
- A児は、腕を机に置き、近くにあったアルミホイルの切れ端を集めてボールのように遊び出す。B児は、A児に「これ（腕）はどうする？頑張って作ったのにもったいないよ。」と言う。A児の反応はなく、B児が自分の引き出しにしまう。 - 片付け後、学級で集まる。教師が、「グループごとに、何がどこまで進んだか教えてください。」と言う。A児は「体と腕と足は出来たけど、腕が大き過ぎた。」と言う。B児「腕は穴に入らなかった。だから腕をなくして、完成にしました。」と言う。教師は「そうなの？A児が頑張って作っていたんだよね。何かに使えたらいいね。アイディア募集中。」と学級全体に言う。	- A児は、B児に声を掛けてもらったことは嬉しいと思っているが、次の目当てや課題を見付けようとはしていない。 A、B、C児の3人だけでは作った腕の活用方法が思い浮かばなかった。 - A児は、「アイディア募集中」という教師の言葉掛けにより徐々に表情を明るくさせて気持ちを立て直しているようであった。	◆困難を支える A児の残念な気持ちを支え、次への行動につながるきっかけを探りながら見守る。 ◆きっかけとなる言葉掛け A、B、C児が困っていることを学級全体に向けて発信できるように働き掛け、幼児同士で聞き合ったり、教え合ったりするきっかけを作ろうとする。

< 考察 >

- ・ 本事例の幼児の様子から、同じ遊びの中でも幼児の「目当て」は変化し、幼児一人一人の活動に違いが現れることが分かった。特に「もぐら叩きゲーム」をしようとする中で、「ゲームを楽しみたい」という気持ちを高めている幼児の姿や、「ゲームに使う人形を見本のイラストのように作りたい」という気持ちを高めている幼児の姿を見ることができた。このことから、教師が、幼児のその時々「目当て」を見取り、適切に援助と環境の構成を工夫することができれば、A児のように自分で「目当て」をもつ姿や、自分の思いが実現できるよう工夫する姿を見ることができると考えられる。また、援助をする際には、教師は幼児の図1の過程を意識しつつ、幼児が遊びの楽しさや目当てに自分で気付くまで見守ることが重要であることを再確認した。
- ・ 本事例の後半で、A児は、自分の作った人形が大き過ぎてゲームに使えないという問題点に気づき、残念な気持ちになっている姿を見せていた。そして、このことを次の「課題」として乗り越えようとするための気持ちになかなか高められないでいる様子であった。そこで、教師が、遊びや活動の展開を急がずに「したいことに出会うまでの時間を保障する」ことを意識したことで、徐々に気持ちを立て直すA児の姿が見られた。

【本事例におけるA児の図1の捉えと教師の援助や環境の工夫】

本事例におけるA児の図1の捉えと教師の援助（◆）や環境の工夫（☆）の関係は次の図2の通りである。

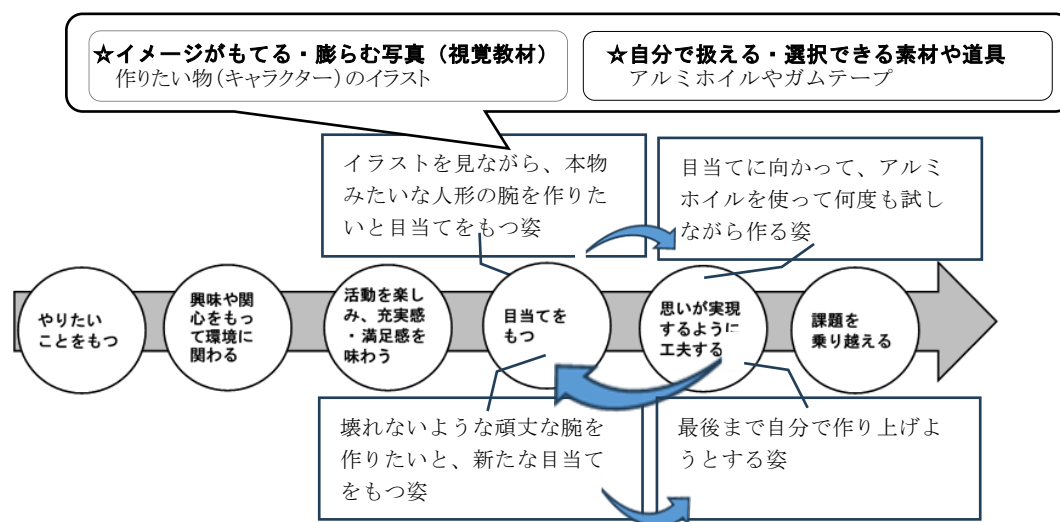


図2 A児の図1の捉えと教師の援助や環境の工夫の関係

また、検証保育後に協議を進める中で、「目当てをもち、考え行動する」過程を積み重ねて、発展的に繰り返していくことが、自信をもって行動する幼児が育つと考え、次の図3のように示した。

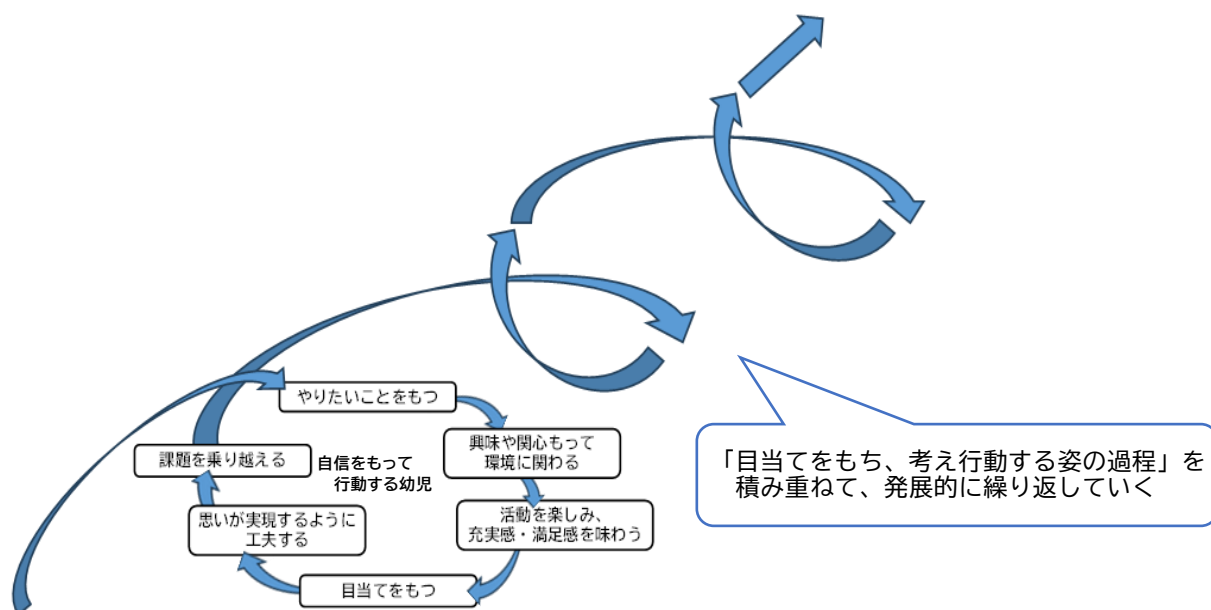


図3 自信をもって行動する幼児が育つ過程

このように、遊びの中で幼児の姿は、図2の矢印のように一方向で順序よく進むのではなく、行きつ戻りつしながら、さらに図3のように積み重ねて、発展的に繰り返すことで、幼児の行動の質が高まっていくと捉えた。幼児が自分の目当てをしっかりともち、その目当ての実現に向けて自信をもって様々なことを考え行動することが徐々にできるようになるよう、教師は、幼児理解に基づいた適切な援助と環境の構成を工夫することが重要であると考えた。そこで、この図3に示した過程で、更に自信をもって行動する幼児が育つかを検証するため、次の検証保育を進めることとした。

2 2年保育 4歳児 9月下旬 D児のやりたいこと「車を作りたいな」

<D児の実態>

- 自分のやりたいことに対して満足いくまで繰り返し関わり、遊びの楽しさを感じているが、次に続く目当てがもてず、遊びが発展しない。

幼児と教師の言動	分析	
	幼児の心の動き	◆教師の援助 ☆環境の構成
やりたいことをもつ 興味や関心をもって環境に関わる		
数名の幼児がペンギンになってごっこ遊びをしている。「氷を滑りたい。」と言うので、教師が巧技台の滑り台を用意する。そこに、D児が、ペンギンの帽子を被り、他の幼児と一緒に滑るが、すぐに場を離れ、絵を描き始める。	保育室の新しい環境（巧技台）が気になったが続かず、普段よく描いている車の絵を描き始めた。	★新しい環境 巧技台の滑り台で氷をイメージし、滑って遊べるようにする。 ◆やりたいことに出会うまでの時間の保障 D児が何をやりたいのか見守る。

やりたいことをもつ		
教師が言葉を掛けると、D児は「キャリアカーだよ。」と答え、次々に車を描く。できあがると教師に見せに行く。教師は、「たくさん車の絵を描いたね。」「これは何の車かな？」などと言言葉を掛けると、D児は「これはキャンプカー。」「もう1枚描く。」など、繰り返し描き続けた。	できたものを教師が見てくれたことで、認められた嬉しさを味わい、さらに描こうという意欲につながる。	★自分で扱える・選択できる素材・道具 イメージしたことをすぐに描けるよう、ペンや紙、テープを用意しておく。 ◆肯定的な受け止め 教師が幼児のやりたいことを受け止め、認めることで「もっと」という気持ちにつながる。

<考察>

- 本事例のD児の様子から、教師が、幼児の好きなもの、興味があるものと関連した遊びができるような援助や環境の構成を工夫することができれば、幼児はやりたいことをもち、遊びを続けられることが分かった。特に、D児がペンギンの「ごっこ遊び」から離れた際に、教師がすぐに言葉掛けをせずに、D児のやりたいことに出合うまでの時間を保障したことは、D児が「車の絵を描きたい」というやりたいことをもつことにとっても有効であったと考えられる。また、興味のある車の絵を描く遊びに変わった際に、幼児が自分で扱える又は選択できる素材や道具を用意したり、D児の思いに肯定的な受け止めを示したりしたことは、D児が安心して遊びに夢中になり始めるために有効であったと考えられる。
- やりたいことをもち、興味や関心をもって環境に関わる過程を充実させ、体験を積み重ねることが、目当てをもち、考え行動する姿につながる。
- これらを受けて、新しい遊びに夢中になり始めたD児が、更に遊びを積み重ねて、発展させるには、どのような援助や環境の構成が必要となるのか、検証を続けることとした。

<検証保育後の保育場面>

- D児の興味・関心に応じた遊びの援助や環境の構成を工夫することで、D児が目当てをもち、自ら考え行動する姿につながるかを検証するため、事後の保育場面の分析を行った。

幼児と教師の言動	分析	
	幼児の心の動き	◆教師の援助 ☆環境の構成
やりたいことをもつ		
「今日も車描こうかな。」と言うD児に、教師が「これ、トラックみたいだね。」と空き箱を手にとってD児に見せる。D児は、「車作ってみたい。」と製作コーナーへ向かう。	教師の言葉掛けから、自分の好きな車を空き箱で作れそうということが分かり、やってみようという気持ちになる。	◆きっかけとなる言葉掛け D児が好きな「車」への興味を更に高めるきっかけとして、新たな遊びを提案する。
興味や関心をもって環境に関わる		
D児は、「タイヤも付けよう。」と材料を探しに行く。ペーパー芯を見付け「これはどうかな。」と言う。教師が「それいいね。」	教師に認められたことで安心してタイヤを貼る。	◆肯定的な受け止め 幼児がひらめいた思いを受け止めることで、安心して取り組めるようにする。

と言うと、ペーパー芯を空き箱に付けて車に見立てて動かす。 ・D児は、「道路も必要だね。」と教師に話す。教師が、灰色のボール紙を渡すと、すぐに紙を並べて道路に見立て、作った車を乗せて動かす。	・道路を作りたいという、自分の思いが教師に伝わり、すぐに実現できて嬉しい。	☆すぐに使える・見立てられるもの 自分で選んですぐに使えるよう、様々な形の空き箱や、タイヤに見立てられるように小さく切ったペーパー芯、幼児のイメージに合うような灰色のボール紙等を用意する。
活動を楽しみ、充実感・満足感を味わう		
＜翌日＞ ・D児は、登園後、すぐに車を手に取り、昨日作った道路の上を走らせる。空き箱や画用紙を使って、信号機や道路標識を作って道路に並べては車を走らせる。	・やりたいことをもって登園している。 ・自分が作った車や道路を気に入って、繰り返し遊ぶことが楽しい。 ・自分のイメージしたものを作れることが楽しい。	☆余裕のある時間と物の確保 遊びに必要なものを自分で作れるような材料を用意し、繰り返し遊びを楽しめるような時間を保障する。 ☆自分で扱える・選択できる素材や道具 自分で扱える大きさの画用紙や小さい箱などを用意する。 ☆イメージがもてる、膨らむ写真（視覚教材） 信号機や道路標識のイラストなどをすぐ見られる場所に用意する。

＜考察＞

- ・ D児の好きなことに関連させて、「自分でも作れそう」と思える活動を提案することで、やりたいことをもつ姿につながった。また、教師からの行動を認める言葉掛けや、すぐに遊べるよう環境の構成を工夫することは、D児が安心して自ら環境に関わる姿につながった。D児が自分から活動するためには、「安心感」が重要であることが分かった。
- ・ 本事例から、図1の過程を図3のように積み重ねていくためには、図1の過程を一つずつ丁寧に進めることが大切であることが分かった。
- ・ 本事例のD児の姿を図3に当てはめて考え、次の図4のように示した。このように整理することで、各過程での教師の援助や環境の工夫によって、D児が自信をもって行動していたことを確認することができた。

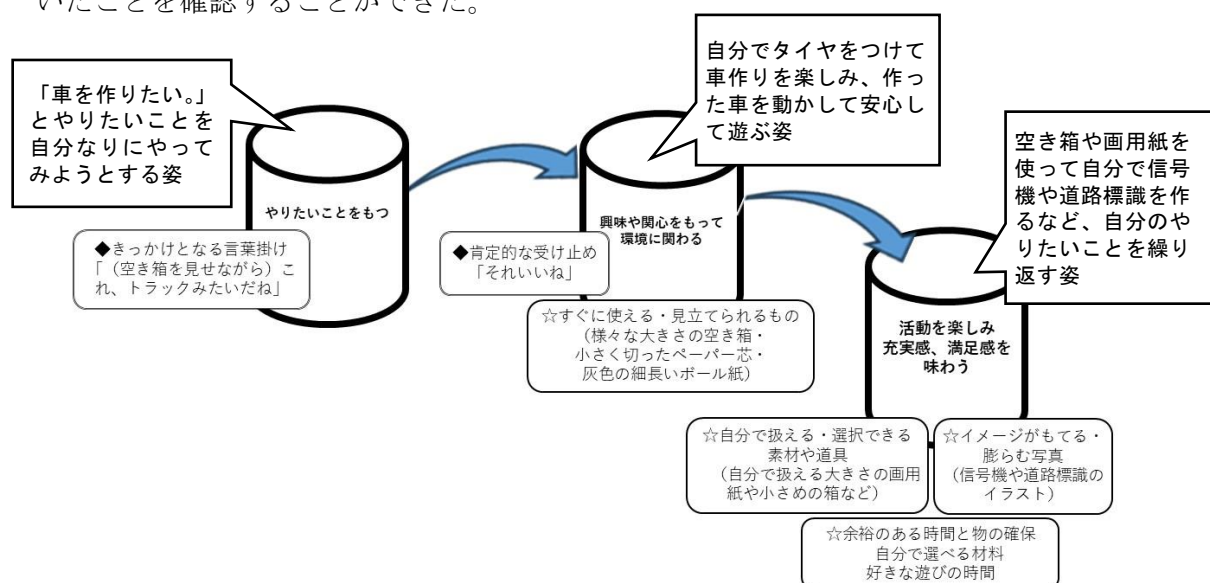


図4 自信をもって行動する幼児（D児）が育つ過程と教師の援助（◆）や環境の工夫（☆）

3 2・3年保育 5歳児 11月上旬 E児の目当て「ボールをもっとよけられるようになりたい」

＜E児の実態＞

- ・ 仲のよい友達と一緒にいると運動遊びを楽しむが、やりたい気持ちがあっても自信のなさから一人では動き出せなかったり、できないことを気にしたりする姿がある。

幼児と教師の言動	分析	
	幼児の心の動き	◆教師の援助 ☆環境の構成
やりたいことをもつ 興味や関心をもって環境に関わる		
＜検証保育の約3週間前＞ ・ E児は、好きな遊びで学級の友達とドッジボールをする。ボールが当たると怒ったり、友達が拾おうとしたボールを横から取ろうとしたりする。 ・ 教師は、E児の気持ちを受け止め、外野に出てもまた戻れるから続けようと励ます。また、教師も仲間に入り、パスをする姿を見せる。 ・ 教師は、友達のボールの投げ方や、捕ったりよけたりすることがうまくいった姿を言葉にする。 ・ E児がボールをよけた時に、教師が「ナイス！よけられたね。」と言うと、E児は「よし！」と言う。	・ 仲のよい友達と一緒にドッジボールをすることを楽しむ一方で、「ボールを当てられると悔しい」「自分がボールを投げたい」という気持ちが強く、チーム戦であることへの意識がまだもてていない。 ・ 先生が支えてくれることで、やってみようとしている。 ・ 動きのモデルとなる友達の姿を見て、自分ももっとうまくなりたいと思いを強くしている。 ・ うまくよけられたことを教師に認められて嬉しい。	★安心して取り組める環境 学級の仲間（安心して遊べる友達関係）で取り組める環境やドッジボールに適したボール（当たっても痛くない用具、幼児が投げやすい大きさ）を用意する。 ◆仲間になって遊ぶ ドッジボールの楽しさが分かっていくように、仲間になって遊びながら動き方のモデルを示したり、言葉で気付かせたりする。 ◆周囲の友達の姿に気付かせる E児の次の目当てにつながるよう、動きのモデルとなる姿を言葉にして知らせる。 ◆肯定的な受け止め E児の頑張りやできたことを認めていく。
活動を楽しみ、充実感・満足感を味わう		
＜検証保育当日＞ ・ 好きな遊びで、学年2クラスの幼児（16人位）でドッジボールをする。E児はボールをよく見て当たらないように動き、「ぼくはよけるのが上手だ。」と言う。教師が「本当だ。上手。」と言うと、笑顔で飛び跳ねる。 ・ E児はボールが当たると悔しがるが、自分で外野に出る。同じチームの友達に「パスして。早く早く。」と	・ 他クラスが混ざった大人数でも喜んでドッジボールの遊びに加わり、楽しんでいる。自分でボールをよけるのが上手だと話したり、コート内で積極的に動いたりしていて、自信や意欲が表れている。 ・ 自分の思いを言葉にし、自分のやりたいことを実現できるように友達に伝えようとしている。	◆活動に適した場、人数の設定 安全面に配慮しつつ、自分の動きを出して楽しめるコートの広さを設定する。また、遊びの楽しさを感じられるように他学級の幼児と遊べる場や時間を設定する。 ◆仲間になって遊ぶ ルールが共通になり、遊びの楽しさを味わえるようにする。

言う。友達の動きをよく見て、ボールが飛んでくる位置に素早く動く。 ・ボールを受け取ると、相手のチームの友達を狙って投げたり、助走をつけて投げたりする。	・ドッジボールで、様々な動きを楽しんでいる。	◆認める言葉掛け E児が楽しんでいることに共感したり、自信をもって動いている姿を認めたりし、充実感や満足感を味わえるようにする。
--	--	---

目当てをもつ	思いが実現するように工夫する
--------	----------------

検証保育翌日以降も、E児はドッジボールを繰り返し行う。ボールに当たると悔しがるが、「ボールをよける」「ボールをキャッチする」という目当てをもち、キャッチすることが上手な友達の動きを見て気付いたことや、自分なりに考えた動きのポイントを教師に話すなど、目当てに向かって考える姿が見られた。	◆思いや考えを引き出す ◆意識化できるような言葉掛け
---	--

思いが実現するように工夫する	課題を乗り越える
----------------	----------

<検証保育の10日後> ・E児は、「(ボールに)当たらないようにしたいから、秘密で練習してるの。」と教師に話す。教師は、「ボールに当たらなくなってきたね。」と言葉を掛ける。 ・ドッジボールのゲーム中にうまくよけられると、「ボールよけるのもっと上手になった。」と言い、教師と目が合う。 ・学級の友達に「下にきたボールをよけるこつを見付けました。」と発表する。	・「ボールに当たらないようにしたい」という目当てをもち、自分なりに考えたり、やってみたりしている。 ・自分なりにやってみたことが生かされ、うまくいったことが自信につながっている。 ・自信がついたことで、自分の考えを友達に知らせたい気持ちをもっている。	◆意識化できる言葉掛け 自分の目当てに向かって、自分で考えて行動する姿を、言葉にして認める。 ◆嬉しさに共感する 自分なりの目当てを達成できたことを、E児と目を合わせ、ジェスチャーで認める。 ◆友達に認められる機会をつくる E児の自信を高められるような機会とする。
---	---	---

<考察>

- ・ E児は、興味や関心をもって環境に関わるが、思うようにボールを投げたりよけたりすることができず、活動を楽しみながら展開し、充実感・満足感を味わう姿につながらなかった。教師が悔しさを受け止め、活動の楽しさを知らせていくことで、幼児が環境に関わり、繰り返し遊ぶ姿を保障できた。
- ・ 活動を楽しめるようになることで、次第に目当てをもつ姿が見られた。自分の目当てを達成できた姿を教師に認められたことで、自信や意欲が高まり、すすんで友達に声を掛けたり、積極的に動いたりすることを楽しむ姿が見られるようになった。
- ・ 検証保育後に協議を進める中で、E児の姿を図3に当てはめて考え、次の図5のように示した。このように整理することで、各過程での教師の援助や環境の工夫によって、E児が自信をもって行動していたことを確認することができた。

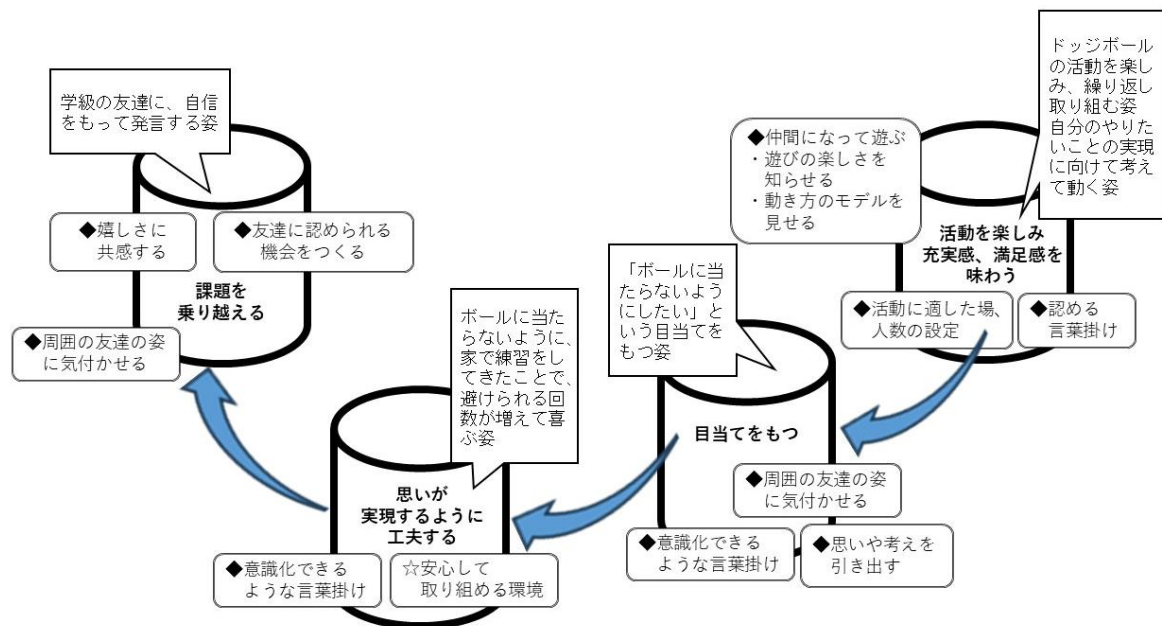


図5 自信をもって行動する幼児（E児）が育つ過程と教師の援助（◆）や環境の工夫（☆）

V 研究の成果

1 幼児が目当てをもち、考え行動する姿の過程を可視化

幼児が目当てをもち、考え行動する過程を図1のようにまとめることで、「幼児の姿がどの過程における姿なのか」を把握し、幼児の遊びの姿から、経験や育ちを振り返る視点が明らかとなった。検証保育を通して、図3で示したように幼児は遊びの始めから目当てをもっているとは限らず、それぞれの過程を行き来しながら経験を充実させていく中で、次第に目当てをもち、考え行動する姿が見られることが分かった。また、幼児が次の過程に進むことばかりを急がずに、各過程で幼児が様々な体験をどのように積み重ねているのかを注意深く読み取りながら、今の過程での体験を充実したものにすることが大切であることが分かった。

2 幼児が目当てをもち、考え行動する姿を支える教師の援助と環境の構成を可視化

図1の各過程において、どのような教師の援助や環境の構成が求められるのかを図6のように整理した。このことにより、各過程において求められる教師の援助や環境の構成が可視化され、教師が幼児の実態を適時・適切に捉え、援助や環境の構成を工夫する際に役立てることができるものとなった。

また、図6を作成するまでに行った検証保育により、自信をもって行動する幼児を育てるには、どの過程においても、教師との信頼関係や、教師から見守られている安心感が欠かせないことを再認識した。

加えて、次の2点について留意する必要があることも分かった。

- ・ 教師が幼児の実態を適時・適切に捉えられず、幼児がやりたいことと教師の援助にずれが生じ、教師の願う幼児の望ましい姿につながらないことがあった。このような場合

には、幼児が各過程を経由できていないことの原因を探り、教師の援助や環境の構成を更に工夫することが大切である。

- ・ 幼児が遊びを楽しむ中で、教師が先行して援助や環境の構成を工夫したことにより、幼児が自ら考え行動する機会を逃してしまうことがあった。このような場合には、幼児がその過程で自ら考える時間を保障し、幼児が遊びの中で、楽しんだり、悩んだり、試したり、悔しがったり、困ったりするなど、心ゆくまで遊べるよう一人一人の幼児理解に基づいて、援助のタイミングを考えたり、環境の構成を工夫したりすることが大切である。

このように、幼児が心ゆくまで遊ぶ中で、自分で選び、自分で考え行動する経験や自分なりに遊び尽くした経験が、自信をもって行動する力へとつながる。この力は小学校以降の生活や学びにおいても、様々な課題を自分のこととして捉え、自分の考えに自信をもち、自ら行動する姿へとつながっていくと考える。

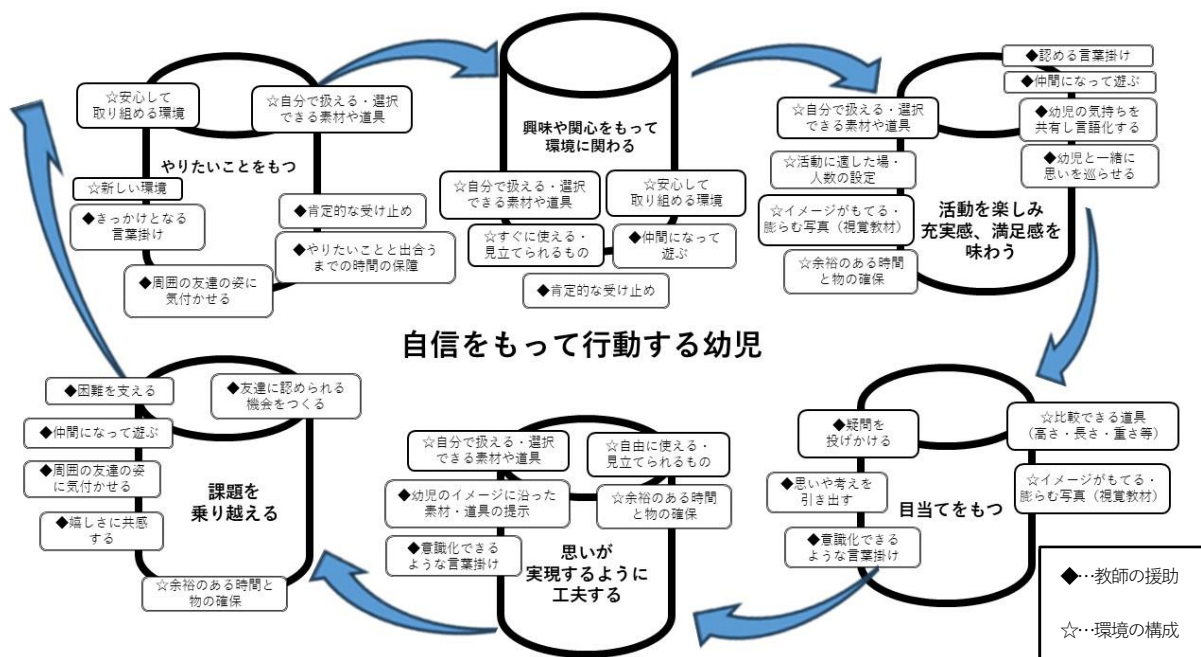


図6 自信をもって行動する幼児が育つ過程と教師の援助（◆）や環境の工夫（☆）

VI 今後の課題

今回整理した図6の汎用性を証明するために、様々な場面の事例を照らし合わせて検討する必要がある。4・5歳児を対象として検証保育を行ったため、本研究で明らかになった教師の援助や環境の構成が3歳児にも有効かどうか、検証していく必要がある。各過程における教師の援助や環境の構成を分類することで、よりきめ細かな援助や環境について研究を深めていきたい。

令和6年度 教育研究員名簿

幼稚園

学 校 名	職 名	氏 名
千代田区立いずみこども園	主任教諭	柴 田 知華子
中央区立月島第一幼稚園	教 諭	風 見 智恵美
文京区立第一幼稚園	主任教諭	会 田 朋 代
江東区立東砂幼稚園	主任教諭	君 島 かおり
世田谷区立砧幼稚園	主任教諭	◎山 田 麻衣子

◎ 世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部義務教育指導課
指導主事 鈴木 晶子

令和 6 年度
教育研究員研究報告書
幼稚園

令和 7 年 3 月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320—6849